

歌舞伎俳優

中村 獅童さん

今回のゲストは、歌舞伎役者としてはもちろん大河ドラマや数々の映画出演など幅広いジャンルで大活躍中の中村獅童さん。落ち着いた真摯な人柄がにじみ出るインタビューとなりました。

ご自身の演技や6月大歌舞伎で襲名披露した息子さんとのことのみならず、歌舞伎の普及や後進の育成、歌舞伎本来のありようなど歌舞伎界全体の過去、現在そして未来を見据えた心構えと実践、「伝統を守りつつ革新し続ける」歌舞伎役者としての矜持など、熱い思いをユーモアを交えながら丁寧に語っていただきました。希望をもって日々精進する姿勢は私たちの仕事にも大いに参考になるものだと思います。

聞き手・構成：野間 自子、佐藤 光子、小峯 健介
写真撮影：坂 仁根



—— 獅童さんは歌舞伎の名門の出ですが、後ろ盾がなかったため長い間役に恵まれませんでした。

父親が歌舞伎界にいなかったので、主役になるのは難しいと言われていました。でも与えられた運命に負けることなく、自分で勝ち取って人生を切り拓いていくという目標をもって頑張りました。

—— 獅童さんは、2020年に『義経千本桜』で、初めて古典で歌舞伎座の主役をされましたね。

ホームグラウンドである歌舞伎座で古典の主演をやらせていただくことには特別な思いがありました。後に(尾上)松也君が僕に「獅童さんがああいうふうになれたから、自分も頑張れば主役ができるかもしれない」と言ってくれたのがとても嬉しかったです。そういう勇気を与える役者でないといけないと思いました。

—— 役者の仕事とは

台本に書かれていないところ(行間)を、どれだけ自分で構築できるかが、我々の仕事でもあり、役者の個性に繋がってくると思います。

—— 役作りは大変ですか。

役作りは毎回緊張します。苦しさを乗り越えるため歌舞伎なら稽古、現代劇なら役作り。台本を読んでこの人はどんな人生を歩んできたのかなと想像します。苦しさを越えられたときにちょっと楽しさや演じる喜びが見えてくる。なかなか難しいことなんですけど、そこを理想にやっています。毎回苦しいことの方が多いですけどね。

—— 演技派といわれますね。

何やっても下手だなと思います。自分の表現力に関しては、いつもクエスチョン。完璧なんてことは全然なくて「あんた、それでいいの？」という気持ちをいつも持っています。満足するなんて死ぬまでないかもしれないし、満足できないから一生続けるのかもしれないです。それでも声を掛けてくださるからやらせていただいているわけで、努力をするのは当たり前です。

—— はまり役といわれる役がありますよね。

そういわれるのは役者冥利に尽きます。実際は、はまり役なんてなくてそう見せるのが役者の技量じゃないかと思っています。例えば、やくざの役をやっていると、あなたはやくざに向いているという人がいますが、普段は全くやくざじゃないわけです。この人絶対怖い人だよねと思わせるのが、悪い役をやっていて楽しいところです。

——モチベーションはどうやって維持していますか。

若いときの熱い思いは、歳を重ねても忘れちゃいけないと思います。モチベーションって難しくて、目標が手に入ると、次はその維持自体が課題になってきます。歌舞伎役者だから安泰という思いはなく、危機感を持って挑戦していく気持ちを忘れないようにしています。

——健康管理で意識していращやることはありますか。

ジムに行っています。食べ物に関しては、夏冬拘らず栄養バランスのよい鍋料理が多いです。野菜をたくさん食べて、ちょっと疲れたなと思うときはお肉多めにしたり。公演中は特にそう。睡眠も大事だと、この歳になって思います。

——獅童さんはエゴサーチもされるそうですね。

僕のが大嫌いで絶対けなす人が1人いて、獅童の芝居を観ていたら酒がますぐなったとか、じゃあ、頼むから観ないでと思いますが、毎回観るんですよ(笑)。

芝居がいい、悪いは、切符を買って観にきてくださったお客様のご意見で自由ですからわりかし平常心で目を通せます。ただネットへ書き込むときは誰もが自由に見られるところに出すという意識を持ってもらいたいです。

——お客様のご意見は役立っていますか。

例えば「コクーン歌舞伎」のときはお客様アンケートがあります。(故十八世中村)勘三郎兄さんもそうでしたが、僕らもそれ全部に目を通します。劇場の人が、目立つところに置いておいてくれるので自由に楽屋に持って行って読むことができます。読むと、なるほどと思うことが結構あります。褒めてくださるのも嬉しいですが、あそこの演出、こうしたらもっとよかった、なんて意見もあります。僕なんかは、いや、おっしやる通り、明日からそこを意識しようと思ったり、実際に変えたりしています。

歌舞伎、特に古典歌舞伎は、客観的に演技を見てくれる監督や演出家がいまないので、自分で演出家的な面を持たないといけません。だからこそお客様のご意見がものすごく参考になります。それで舞台出演中はエゴサーチをわりとします。

——獅童さんは、『あらしのよるに』や『超歌舞伎』などで、革新的取組みをされています。

普通に考えたら映像との共演は不可能ですが、「不可能だろうと思われることにチャレンジする」のが中村獅童です。(初音)ミクさんのファンの方たちにも歌舞伎に親しんでもらい、従来からの歌舞伎ファンにも楽しんでいただけるようなエンターテインメントができればいいなという思いでした。

ミクさんの代表曲『千本桜』が大ヒット中だったので、歌舞伎の名作『義経千本桜』に絡めて、『今昔饗宴千本桜』という作品を作りました。

——初演から8年、舞台も技術も随分進歩しましたね。

生身の人間以外との共演は初めての経験で、ミクさんの独特のセリフの間への慣れや踊りのときの息の合わせ方など信頼関係を徐々に築き上げていったように思います。NTTさんの並々ならぬご努力と最新テクノロジーによって、この間、音響が格段に進歩し、ミクさんの姿がどんどん鮮明になっていきました。この公演を通じて歌舞伎におけるデジタルの在り方が明確になってきたように思います。

——『超歌舞伎』は南座とか歌舞伎座など歌舞伎の本拠地でも上演されましたね。

ドワンゴさんのイベント「ニコニコ超会議」の一環として幕張メッセで始まったものですが、いずれは歌舞伎を上演する劇場でやってみたいという思いは初演時から心の中にありました。皆様のご賛同によってやっと実現できました。

——お客様の反応はいかがでしたか。

最初は不安でした。特に南座で上演するときに古典好きのお客様がこの独特なノリについていけるのかと心配でした。ところが最後、皆様ペンライトを持って、総立ちになってくださいました。その光景を見たときやってよかったなと思いました。ミクさんファンのオタクと言われる方たちがペンライトを今まで触ったことのないような方たちにこのタイミングで振ってくださいと教えたり、ペンライトを貸したりとかして。新旧ファンと一緒に夢を見、笑い、泣く時間を過ごす空間。これが『超歌舞伎』のいいところだと思います。

——ペンライトは舞台から見えていても、普段と違っていませんか。

声援によって、弱りかけていた主人公が蘇って、悪者を退治するという王道ストーリーですが、今まで見た

ことのない南座・歌舞伎座の風景が実現できたことは大きな喜びでした。

開演前には在庫があったペンライトが、終演後に完売するという面白い現象も起きました。古くからの歌舞伎ファンの方がどういうわけか帰りがけに買っていくんです。楽しかったからまた来ようとか、孫にプレゼントしようとか。

——「電話屋」とか「初音屋」などの新しい屋号の掛け声も出てきましたね

全部、自然発生です。最近では息子が出てくると、「ジュニ屋」ですよ。そして僕が出てくると「ちちお屋」。ミクさんファンの方たち、なかなかしゃれっ気があって面白いです。普段の歌舞伎では大向うさんが声掛けしますから一般の方は声掛けしにくいと思います。

この点、『超歌舞伎』に限っては自由なんです。最新テクノロジーを取り入れた新作ですが、性根にあるのは、江戸時代の庶民が歌舞伎を見て熱狂した、その精神です。僕も常に歌舞伎は大衆の楽しむものという原点を意識しています。

—— コロナ禍で声が出せないとき、大向う付オリジナルペンライトが出てきたそうですね。

コロナ禍で、劇場では声出しが禁止になりましたが、掛け声がないとどうにも盛り上がり欠ける。苦肉の策ですね。ペンライトに大向うさんの掛け声を録音して、ボタンを押したら出るようにできないかというのが始まりです。

—— 生配信の時は書き込みもありますね。

幕張メッセでは生配信しているので、引っ込んでいるときは書き込みを見られます。例えば鉄杖という自撮り棒に似た持ち物がありますが、「何だ、あの自撮り棒みたいなの」「あれは鉄杖といって舞踊なんかによく出てくるよ」みたいに、上級者の方が初心者の方に教えている光景なども目にします。生配信はそういうお客様同士の交流ができるので楽しいコンテンツではないかと思っています。

——『超歌舞伎』は観客層を広げるというのに大きく貢献しました。

それが自分の使命だと思っています。歌舞伎を見たことのない若い世代の方たちにも振り向いてもらえました。そういう意義が『超歌舞伎』にはあります。

——『あらしのように』では、お子さん達も大勢いらっやったそうですが、お子さんと歌舞伎についてはどう思われていますか。

『あらしのように』がアナログな歌舞伎の古典を題材にした世界観だとしたら、『超歌舞伎』は古典歌舞伎とデジタルとの融合、バーチャルな歌舞伎。それぞれスタイルは違いますが、共通して言えるのは、お子様から歌舞伎上級者まで楽しんでいただける点です。

7月の『HOW TO かぶき』の巡業も(尾上)菊之助さんと共演する12月の歌舞伎座公演『あらしのように』もお子さんたちと楽しめるものです。彼らが、息子たちと一緒に歳を重ね、大人になっても歌舞伎をみようというふうになっていって欲しいですし、そうしないと先細りになってしまいます。今日明日のこととても大事ですが、それだけでなく20年後、30年後の未来をも見据えないといけません。

—— 歌舞伎界は世襲制度の根強い世界のようにも見えますが、獅童さんはいわゆる梨園の出ではない人の抜擢とか、若手の方の引き上げに尽力されていると聞いています。

世襲制は多面的に考えるべきテーマです。

例えば獅童の息子の舞台を観た人が彼の成長を見届けたいと思い、実際見続けることのできる演劇が歌舞伎なんです。私は、あの子のお父さんの代、おじいちゃんの代から応援しているのよと自慢話ができるのも歌舞伎です。ですから、世襲制というのはファン目線で言うと、歌舞伎の楽しみ方の1つであって、いいことなんです。

同時に、ではお弟子さんたちが一生主役になれないのかと問われたときに、それではいけないと思っています。光るものがあれば出自に関係なくその人をもっと抜擢してほしいと願うのもファン心理です。

今、個人的に僕が抜擢したということになっていますが、業界全体を考えたとき、世襲制のスターだけではなく、そうでない人たちの中からもスターをつくっていく必要があります。

ただ、お弟子さんにも2通りあります。師匠を一生支え続ける。これも本当に素晴らしい考え方で、そういう方たちがいらっやらないと芝居は成り立ちません。

もう1つは支えつつも機会があったらいい役をやってみたいと思う人たちです。これも素晴らしい考え方で、その思いを無駄にはしてはいけません。

歌舞伎も時代に合わせ、変えるべきところは変え、大切に残さなきゃいけないところは残すべきです。同じ

ことをやり続けているだけではだめです。時代とお客様が求めるものを真剣に考えてかないと。

—— コロナ禍は舞台関係者にとっては、大ダメージだったと思います。

緊急事態宣言のとき、公演は中止、その後の予定も全て白紙になったわけです。悔しいと同時に苦しい、人生最大のピンチでした。僕は家族がいましたが、1人でずっと耐えるしかなかった人たちは本当に気が滅入って不安になったと思います。

—— この間、獅童さんは、ミームニッポンプロジェクト (meme nippon project) や舞台配信など多様な活動をされていらっしゃいましたね。

未来につながる、未来への希望をもてるような公演を目指しました。それがミームと『超歌舞伎』の配信です。

歌舞伎界での配信の元祖は『超歌舞伎』だと自負していますが、こういうときだからこそ無観客、生配信でやりましょうとお願いして実現しました。このときの『超歌舞伎』は澤村國矢君と一門の中村獅一が主人公でした。コロナ禍で観劇できないファンの方たちに楽しんでいただくことが大前提でしたが、お弟子さんたちも頑張れば真ん中に立てるという希望になればいいなという気持ちが僕の中にはありました。

—— この時期、ご家族との触れ合いも増えましたね。

家族の関係ではかけがえのない時間になりました。コロナ禍がなければあれだけ子供たちと毎日一緒に過ごすことはなかったです。キャンピングカーで旅もしましたが、楽しすぎて2年待ちで購入してしまいました。少年の頃、こういう車って夢だったんです。

—— コロナ禍はマイナスばかりではなかったのですね。

マイナス×マイナスでなくて、ピンチをプラスに変えるのが人生だと思っています。1回ストップして、原点や未来を考える時間を神様が与えてくださったと思いました。この時期が一概に苦しいだけの時間で終わらず、未来を考え、明日への活力を養える時間となったのはよかったと思います。

—— 歌舞伎は、昔から面白さを追求し、その時代の人の嗜好や空気を取り入れてきたように思います。

歌舞伎はずっと庶民の娯楽でした。TVや映画、ニ

ューズの役割もありました。江戸時代、アイドル、スーパーヒーロー、ファッションリーダー、あらゆる存在が歌舞伎役者でした。誰もが気軽に楽しめる芸能だったし、流行の最先端だった。その精神は現代を生きる我々自身も持っています。最先端だし、最先端を目指しています。

—— 獅童さんの生きざまは伝統的な歌舞伎役者だなと思います。

『超歌舞伎』は、新しい奇抜なことをやっているようで、精神的に言えば江戸時代の傾く精神を受け継いでいます。当時、最新テクノロジーがあったら絶対やっていたはずですよ。結局、『超歌舞伎』で現れた光景は江戸時代なんですよ。

伝統を守りつつ革新していくことが大切です。

—— これからやってみたいことは何ですか。

『超歌舞伎』は20カ国ぐらいで配信したのかな。今度は現地で古典と新作のバランスのとれた舞台ができたらいいなと思います。

—— 歌舞伎の魅力というのは、どういうところにありますか。

デジタル時代の現在、四季は曖昧になり、自然も失われつつあります。

これに対して歌舞伎には四季がはっきりと残り、日本人特有の義理人情、親子の絆など生身の人間の感動があります。こういうアナログな世界が今後一層貴重になっていくと思います。

—— 独立したてで苦勞している若い弁護士をはじめとする頑張っている人向けのエールをお願いします。

少年のときに抱いていた気持ちを忘れず自分らしい生き方を続けていってほしいです。日々の積み重ねがやがてその人の生きざま、個性につながって、その人らしい魅力につながっていくと思います。夢や希望を大切にしてください。これは、僕自身にも言えることです。

プロフィール なかむら・しどう

1972年生。東京都出身。日本大学藝術学部演劇学科 (名誉) 卒業。8歳で初舞台、二代目中村獅童を襲名。屋号「萬屋」。歌舞伎、ドラマ、映画、アニメ (声優)、舞台などジャンルを問わず多彩な才能を発揮。1997年国立劇場特別賞、2002年映画「ピンポン」で日本アカデミー賞新人賞他5冠、2004年日本アカデミー賞優秀助演男優賞、2005年ゴールデンアロー賞演劇賞他受賞多数。伝統的な歌舞伎に加え「超歌舞伎」他新作歌舞伎に出演。歌舞伎の普及や後進の育成にも尽力。